ほぼ週刊コラム　Partnership論　その２２７

**シリーズ：『米国Partnership税制勉強会』**

**第三十三回（最終回）勉強会（通年内容は[年表rev.9](http://llc.a.la9.jp/Papers/evolution%20history/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev9.ppt)参照方）の準備**

[**partnership capacity**](https://books.google.com/ngrams/graph?content=partnership+capacity&year_start=1500&year_end=2000&corpus=15&smoothing=3&share=&direct_url=t1%3B%2Cpartnership%20capacity%3B%2Cc0)**の起源は[Revolutions of 1848](https://en.wikipedia.org/wiki/Revolutions_of_1848)**

20170310 rev.1 齋藤旬

 [**Inventing the People**](https://www.amazon.com/Inventing-People-Popular-Sovereignty-England/dp/0393306232/ref%3Dsr_1_1?ie=UTF8&qid=1477553338&sr=8-1&keywords=Inventing+the+People)**の半訳作業ファイルwork16を[和英混訳](http://llc.a.la9.jp/WaEi%20KonYaku.htm)のコーナーにアップした。**

2．The Enigma of Representation 35-36

これらの頁を半訳した。

　**先週は[コラム２２６](http://llc.a.la9.jp/Column%20hobo-shuukan/2017/20170303%20W226%20corporate%20charter/20170303%20W226%20corporate%20charter%20rev1.docx)「corporate capacityの起源はdivine right of kings」という話をしたが、今週は「partnership capacityの起源は[Revolutions of 1848](https://en.wikipedia.org/wiki/Revolutions_of_1848)」という話をしよう。**

今一度Google Ngramの[partnership capacity](https://books.google.com/ngrams/graph?content=partnership+capacity&year_start=1500&year_end=2000&corpus=15&smoothing=3&share=&direct_url=t1%3B%2Cpartnership%20capacity%3B%2Cc0)を見てみよう。とても奇異な感じがする。というのは、ハムラビ法典にすら痕跡を見ることができるほど古代から存在するpartnershipが、人間が持ちうる最上位の能力、つまりcapacityを持つとされたのが19世紀半ばだというのがどうにも腑に落ちないからだ。より人工的で起源も新しいcorporateのcorporate capacity概念の発明（1604-1610）よりも後だというのは不思議だ。ここは「何かある」と考えるのが自然だ。

　**今、大量の関連書籍・文献を職場から自宅に引っ越し最中で、詳しくは調べられないが**、この唐突な登場は[**Revolutions of 1848**](https://en.wikipedia.org/wiki/Revolutions_of_1848)と密接な関係がある。

　和訳では[1848年革命](https://ja.wikipedia.org/wiki/1848%E5%B9%B4%E9%9D%A9%E5%91%BD)となり複数形が消えて同時多発革命であることが分からなくなる。更に説明がまずい。曰く「**1848年革命**（1848ねんかくめい）は、[1848年](https://ja.wikipedia.org/wiki/1848%E5%B9%B4%22%20%5Co%20%221848%E5%B9%B4)からヨーロッパ各地で起こり、[ウィーン体制](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%B3%E4%BD%93%E5%88%B6)の崩壊を招いた[革命](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9D%A9%E5%91%BD)。1848年から1849年にかけて起こった革命を総称して「**諸国民の春**」（[仏](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B9%E8%AA%9E): Printemps des peuples, [独](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E8%AA%9E): Völkerfrühling, [伊](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%82%BF%E3%83%AA%E3%82%A2%E8%AA%9E): Primavera dei popoli）ともいう。」　ここは諸国民の春ではなくthe Peoplesの春（springtime）とすべきだ。つまりthe Peoplesを諸国民と和訳するのは誤解を招く。the Peoplesあるいはthe Peopleは日本語で言う「国」とは或る意味対立することも辞さないthe public sphereを形成する人々だからだ。

　イメージとしては、米独立宣言（1776年）からリンカーン演説「of the people, by the people, for the people」（1863年）までの所謂Independent Revolutionと同様な革命が、西欧大陸に広まっていくのが[**Revolutions of 1848**](https://en.wikipedia.org/wiki/Revolutions_of_1848)だと考えれば良いだろう。

　**即ち、半訳作業中のInventing the Peopleに示されたthe People概念が、発明者である英米から西欧大陸へと広まったのは19世紀半ばのことだった、ということ**。

　今、引っ越し用の段ボール箱の中にあるが、[ドイツ産業革命―成長原動力としての地域](https://www.amazon.co.jp/%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E7%94%A3%E6%A5%AD%E9%9D%A9%E5%91%BD-%E6%88%90%E9%95%B7%E5%8E%9F%E5%8B%95%E5%8A%9B%E3%81%A8%E3%81%97%E3%81%A6%E3%81%AE%E5%9C%B0%E5%9F%9F-%E3%83%95%E3%83%BC%E3%83%99%E3%83%AB%E3%83%88-%E3%82%AD%E3%83%BC%E3%82%BC%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%82%BF%E3%83%BC/dp/4771017026/ref%3Dpd_sim_14_1?_encoding=UTF8&psc=1&refRID=CSZX2SYJG0X3A30F5B7C)、[ドイツ産業革命と国家](https://www.amazon.co.jp/%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E7%94%A3%E6%A5%AD%E9%9D%A9%E5%91%BD%E3%81%A8%E5%9B%BD%E5%AE%B6-1979%E5%B9%B4-%E6%A1%9C%E4%BA%95-%E5%81%A5%E5%90%BE/dp/B000J831FE/ref%3Dsr_1_fkmr0_3?ie=UTF8&qid=1489120926&sr=8-3-fkmr0&keywords=%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E3%80%80%E5%B8%82%E6%9D%91%E3%80%8019%E4%B8%96%E7%B4%80%E3%80%80%E7%94%A3%E6%A5%AD)、などを調べれば、the people概念あるいはpartnership capacityとRevolutions of 1848との更に密接な関連を説明できるがそれはGW以降に願いたい。

　ただ要点だけ言うと、Revolutions of 1848の様な革命（springtime of the Peoples）が起こらなかった、あるいは、不完全にしか起こらなかった日本では、the people概念あるいはpartnership capacity概念が導入されることはなかったのだろう。

　**ここでは19世紀半ばの西欧大陸において、勃興しつつある社会主義経済にも資本主義経済にも嫌悪感を示し新たに発明された（または見直された）事業組織体の具体例として、Carl Zeissという事業体を挙げよう**。（詳しい資料は段ボール箱の中なので、記憶している範囲で述べる。）

**Carl Zeissの19世紀略年表**

　1846年、Jena大学（1558年設立）の片隅に腕の良い光学機器職人であるCarl Zeissが大学付属の光学機器工房を開いた。

　1861年、Ernst Karl Abbeがゲッティンゲン大学で物理学博士号（光学）を取得。

　1863年、Ernst Karl AbbeがJena大学に赴任。以降、Carl Zeiss光学機器工房の卓越した技術レベルの下に光学研究に勤しんだ。

　1889年、事業組織法制に卓越した研究をしたことが認められJena大学から法学博士号も付与されたAbbeが、Carl Zeiss Stiftung（シュティフトゥング）を設立。

　**このStiftung（シュティフトゥング）とは何か、説明しよう**。早い話がノーベル賞のノーベル財団を想像すれば良い。スウェーデン語でNobelstiftelsen、ドイツ語でNobel Stiftung。一般化すれば、巨大資金をプールし、何か人類文明の発展のためにその資金を使う組織体。ちなみにノーベルStiftungが設立されたのは19世紀最後の年の1900年のこと。ダイナマイトを発明し多くの戦争で多くの殺戮に加担してしまったAlfred Nobel（1833-1896）がその富を元にノーベル賞を設立することを求めて1895年にしたためた遺言に基づいている。

　ほかにStiftungとして私が記憶しているのはアデナウアーStiftung。これはHitlerナチス政権のドイツによって世界の信用を失ったドイツの西ドイツ首相を戦後の1949年から1963年まで務めドイツの信用回復に成功したKonrad Hermann Joseph Adenauer（1876-1967）が、米Georgetown Universityなどに寄付して作られた財団。[日本事務所もありそのHP](http://www.kas.de/japan/ja/)からどんな組織なのかが分かる。

　しばしばCarl Zeiss組織をCarl Zeiss社と日本では記すが、これは誤解の元だ。「社」というと利益を生むことが目的のように感じられる。そうではない。Carl Zeiss Stiftungの目的は光学技術研究によって人類文明を発展させることだ。

　[Carl-Zeiss-Stiftungの英語Wikipedia](https://en.wikipedia.org/wiki/Carl-Zeiss-Stiftung)を見れば分かるが、現在、Carl Zeiss Stiftungが単独shareholderとなって[Carl Zeiss AG](https://en.wikipedia.org/wiki/Carl_Zeiss_AG) と[Schott AG](https://en.wikipedia.org/wiki/Schott_AG)の二社が活動している。このAG二社は確かに日本の株式会社あるいは英米corporateに似た組織体で、annually accrual accounting（年度毎の発生主義会計）がmandatoryであり、ここだけ見ると利益を毎年計上することが目的と映る。Carl Zeiss社と日本で誤解される理由もこの辺りにあるのかもしれない。しかし、このAGの単独shareholderはCarl Zeiss Stiftungなのだから、その利益金は人類文明発展に使われる。真の目的は利益を上げることではないことが分かる。

　**このCarl-Zeiss-Stiftungのほかにも19世紀ドイツでは、社会主義経済にも資本主義経済にも嫌悪感を示す事業組織体が幾つも生まれた**。そして、米LLC制度を百年先取りしたと言われるGmbH（Gesellschaft mit beschränkter Haftung）の制度が19世紀末の1892年に発明された。この辺りの説明もGW後、引っ越し段ボール箱が片付いてからに願いたい。

仕事部屋引っ越しで慌ただしい。駆け足で述べたが、今週は以上、来週も請うご期待。